

所属	国際交流研究科 国際交流専攻 修士課程	修了年度	平成 25 年度
氏名	姚 燕芳	指導教員	飛田 満

論文題目	世界文化遺産観光地の持続可能な発展に関する研究 — 一日中事例比較 —
------	--

本文概要

本論では、中国と日本における重要な世界文化遺産の事例を取り上げ、分析、比較する。生活空間における観光開発では地域住民が現代人として当然の「生活の質」の向上や経済的発展を遂げながら、自らの営みや生活環境の有形・無形の文化遺産としての価値も維持・継承するという難題の解決、そして、持続可能な観光開発の実現を目指していくことについて提案する。

論文構成

第1章では、中国の世界遺産を紹介し、雲南省麗江市の事例を取り上げて、世界遺産の登録経緯、登録後の観光の現状と問題を分析する。麗江古城の建築は各民族の文化特徴を融合させ、世界によく知られている。1997年12月、世界遺産登録後、麗江旧市街地は世界的な観光地となった。年々増加する観光客を収容するために、旧市街地内では建物の増改築が行われ、客棧（ゲストハウス）やカフェの数が急増している。現地住民や生活環境にかなりの悪影響をもたらした。

第2章では、日本の世界遺産を紹介し、白川郷合掌造りの事例を取り上げて、その現状を分析する。そして、観光化がその地域に与えた影響について検討する。1995年12月9日に白川郷合掌造りが五箇山の合掌造り集落と一緒にユネスコの世界文化遺産に登録され、日本では6件目の世界遺産となった。麗江と同じ、白川郷は住居として利用されながらも世界遺産に登録された点において、世界文化遺産の中でも稀な存在である。

第3章では二つの事例を基にして、世界文化遺産における観光開発や保護の問題についてそれぞれの保護政策を比較する。二つの事例とも文化遺産を観光資源として、大量な観光客を招きこんで、観光産業を通じた経済的利益獲得の要求を優先してしまった。観光産業の発展と住民生活の向上、文化遺産の維持・継承との間に持続可能な関係性がまだ完全に構築されていないまま観光産業が進んでしまうのである。

第4章では、世界文化遺産が現在直面している保護と観光開発との関係性に関する問題を挙げ、解決のための提案をしたいと思う。そして、世界遺産制度の本当の目的を改めて認識し、世界遺産観光ブームに踊らされず、冷静に世界遺産としてあるべき姿を考える。

結論

文化遺産地の観光開発とりわけ持続可能な観光開発においては、観光開発そのものより、観光開発主体と地域住民や地域環境との関係こそが重要である。そこで、世界文化遺産地における持続可能な観光開発を実現するには、まずは観光開発あるいは観光活動が長期的にみて「環境の適正収容力」を超えないことが重要である。そして、観光開発主体と地域住民や地域環境の間で良好な関係の確保することが不可欠である。地域住民を主体として行政、国際支援組織等が協働して持続可能な形で観光開発を推進し、その結果として得た資金を生かして経済的ゆとりを得、地域に還元して社会的・文化的な発展を目指しながら文化遺産の保護、保存にあたることを考えられる。それに、観光客の側に世界遺産の価値を理解していない、あるいは深く理解しようという意志が欠けていることで、教育の手段を使って、世界遺産に関する知識や教養を人々に深めさせていくことが必要である。このような観光開発を行うことによって、他律的に行われている文化遺産の保護、保存を自律的に行い、加えて現在問題となっている観光開発による文化遺産の破壊を抑制できるのではないだろうか。